



Title	World Englishes : その概念と日本の英語教育へ意味するもの
Author(s)	大坪, 喜子
Citation	長崎大学教育学部紀要. 教科教育学. vol.33, p.69-77; 1999
Issue Date	1999-06
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10069/5877">http://hdl.handle.net/10069/5877</a>
Right	

This document is downloaded at: 2018-09-25T01:29:23Z

World Englishes:  
その概念と日本の英語教育へ意味するもの

大坪 喜子

(平成11年3月15日受理)

World Englishes:  
Its Implication for Japanese English Education

Yoshiko OTSUBO

(Received, March 15, 1999)

はじめに

“World Englishes” (世界諸英語) とは、多くの人にとってはまだ耳なれない用語であるかもしれない。しかし、Braj B. Kachru & Larry E. Smith (eds.), *World Englishes: Journal of English as an International and Intranational Language* (Blackwell) は、1999年3月現在、第18巻、第1号をすでに発行している。また、1993年には、“The International Association for World Englishes” も設立され、その国際学会もホノルル (1993)、イリノイ (1994)、日本 (1995)、ホノルル (1996)、シンガポール (1997)、イリノイ (1998) というように開催されてきており、1999年は、日本で開催されることになっている。本稿では、“World Englishes” の概念とその趣旨を紹介し、それが日本人にとって、特に、日本の英語教育に携わっている者にとって何を意味するのかを考えることにする。以下、まず、“World Englishes” の概念の出発点であるとも言える Larry E. Smith 氏の “English as an International Language” (国際語としての英語) についての考え方を紹介し、ついで、Braj B. Kachru 氏の “World Englishes” の考え方を紹介する。そして、最後に、“World Englishes” の日本の英語教育へ意味するものを考える。

1. “English as an International Language” (国際語としての英語)

“English as an International Language” については、1977年から1985年頃を中心に、ハワイのイースト・ウエストセンター (The East-West Center) における Larry E. Smith 氏のプログラムでしばしば取り上げられていたテーマであった。筆者も、ハワイ大学とイースト・ウエストセンター主催のアメリカ言語学会夏期講座 (The 1977 Summer Institute of Linguistics; The Linguistic Society of America) で開講された “English as an International Auxiliary Language” (Larry E. Smith 氏他担当) という大学院のコースを受講したのをはじめ、1984年夏に6週間 (7月3日から8月10日)、“English as an

International Language” というイースト・ウエストセンターのプログラム (Larry E. Smith 氏担当) に参加し、多くの国々で英語教育に携わっている人々と意見交換をしながら、日本人の立場から “English as an International Language” (以下 EIL) についていろいろ考える機会があった。ここでは、EIL の特徴を明らかにするために、“English as a Second Language” (以下 ESL)、“English as a Foreign Language” (以下 EFL) および “English to Speakers of Other Languages” (以下 ESOL) との関係を明らかにすることからはじめよう。

ESOL とは、ENL (English as a Native Language) に対するもので、その中に ESL と EFL が含まれることになる。ESL は第一言語 (母国語) を持っていないが、日常生活で英語を使っている場合を指しており、EFL は日常生活では母国語を使っており、英語は日常生活では不必要であり、学科目として英語についての知識を学習している場合が多い。この関係を図示すると次のようになるであろう (Otsubo, 1978:37)。

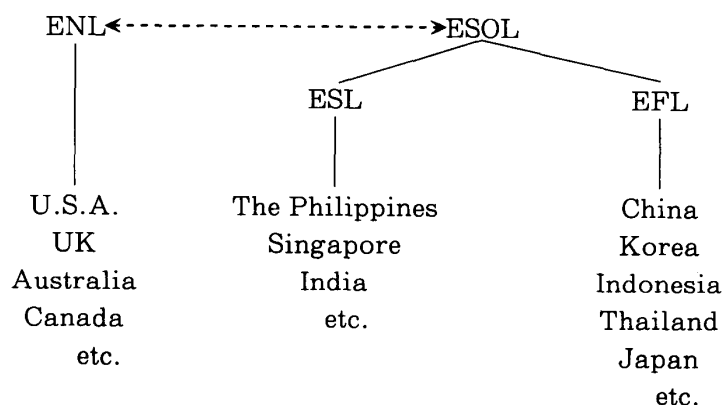


図 1

すなわち、〔図 1〕は、まず、ENL と ESOL は、母国語と非母国語という対立関係にあることを示し、さらに、ENL の国は母国語として英語を使っている国、ESL の国は、母国語 (第一言語) を持っていないが、第二言語である英語を日常的に使っている国、そして、EFL の国は、日常的に母国語を使っており、英語は使われない国を示している。(但し、現実的には、EFL の国の人であっても、英語が使われている国へ行けば、その人にとって、英語は第二言語として使わなければならない言語、つまり、ESL となる。)

EIL (English as an International Language) という観点から言えば、このように英語が使われる状況が異なるにもかかわらず、ENL・ESL・EFL は対等の立場になってしまう。次に示す Larry E. Smith 氏の EIL についての説明はこれを裏付けることになるであろう。

..... English is not one of our national languages, but it is our international language. And English as an international language is not the same as English as a second or foreign language.

When any language becomes international in character, it cannot be bound to any one culture. A Thai doesn't need to sound like an American in order to use English well

with a Phillipino at an ASEAN meeting..... It is clear that in these situations there is no attempt for the user to be like a native speaker of English, English is used to express the speaker's business policy, government position, or political conviction. It is the means of expression of the speaker's culture, and *not* an imitaion of the culture of Great Britain, the United States or any other native English speaking country.

English, when used as an international language, is not owned by its native speakers (Suzuki, 1979), and native and non-native speakers everywhere must become aware of the widespread shift in attitudes and assumptions about the language.

(Larry E. Smith 1983:7-8)

Smith氏によれば、EIL という場合、英語はどの国にも、どの文化にも属するというのではなく、それぞれの人が、自分の考えを、また、自分の文化を表すために英語を使えばよいということになる。言い換えれば、イギリスやアメリカなどの英語を母国語とする国々の文化の模倣をするのではなく、自分の文化に従った表現をすればよいということ述べている。このような EIL と ENL./ESL/EFL との関係を図示するとすれば次のようになるであろう。

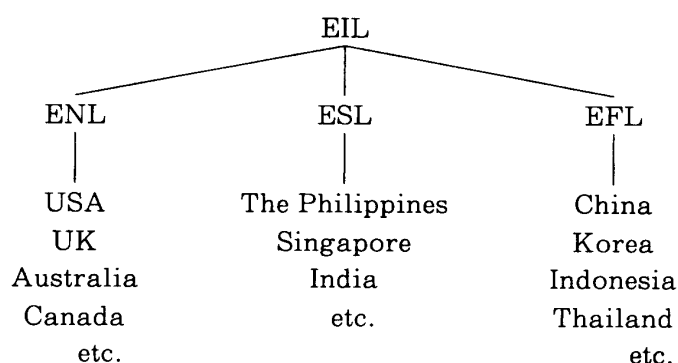


図 2

〔図 2〕は、EIL という立場では、ENL・ESL・EFL は対等であることを表している。言い換えれば、EIL とは、英語を母国語とする人・第二言語として使う人・外国語として学習している人が、必要に応じて、英語をコミュニケーションの手段として対等に使用していることを意味する。

理論的には、EIL は、〔図 2〕が示しているように、ENL/ESL/EFL を対等の立場にあると考えるが、現実的には、母国語話者の英語、第二言語として英語を使っている人の英語、そして、外国語であり、日常的に英語を使わない人の英語では、大きな相違がある。従って、EIL についてこれまで議論されてきたことは、その多様性にどのように対処すればよいのかということについてであった。そして、“mutual intelligibility”, “grammatical acceptability”, “social appropriateness”, “tolerance for different pronunciation patterns” など (Smith 1983:8-9) が熱心に議論された。特に、ESL/EFL の場合、多かれ少なかれ、それぞれが、それぞれの母国語の影響のある英語でコミュニケーションをすることになるわけであるから、お互いに相手の英語を理解する努力をしようというのが議

論の主な趣旨であったといつてよい。議論に参加しながら、EFLの立場にいる筆者にとって、もっとも印象的であったのは、EILの場合、英語の母国語話者も非母国語話者の英語を理解する努力をするのが当然であるという考えかたが前面に出されていたことである。それは、従来のESOLの場合と大きく異なるところである。ESOLの場合、ESL/EFLの人がいつもENLに近づく努力を求められる立場になる。さらに言い換えれば、従来は、英語の母国語話者がその中心であったが、EILの観点からは、母国語話者も非母国語話者も対等に英語でコミュニケーションをしていることに焦点がおかれていることになる。従って、母国語話者にも非母国語話者の英語を理解する努力が求められることになる。

但し、ここで、EFLの立場から、急いで付け加えておかなければならないことがある。それは、EILの観点から、英語でコミュニケーションをする場合、母国語話者と非母国語話者が理論的に対等であるとはいえ、非母国語話者であるわれわれは、母国語話者の英語をモデルとして練習するのは当然のことであるということである。ここで指摘しておかなければならないことは、母国語話者の英語をモデルにして練習し、英語を自由に自分のことばとして使えるようになったとしても、母国語の影響は免れないように思われるということである。インドやフィリッピンなどのESLの国の人々は、英語を自分のことばとして自由に使えるが、その場合、母国語の影響がむしろ自然に出てくるようにさえ思われる。われわれは、彼らの話す英語を聞いて、インドの人であるとか、フィリッピンの人であると判断できる。しかし、そのように母国語の影響があるとはいえ、英語を自分のことばとして自由に使える段階になってはじめて、「インド(人)の英語」、「フィリッピン(人)の英語」であるというように言うことができるのではないかと思う。そして、そのような世界各地の英語をBraj B. Kachru氏は‘World Englishes’(世界諸英語)と呼んでいる。

そして、EILの多様性を、“World Englishes”(世界諸英語)の観点から、それぞれの英語の特徴として捉え、それぞれの英語の特徴を記述するという方向へ深められてきている。

## 2. “World Englishes”(世界諸英語)

Braj B. Kachru氏(1992, 1995)によれば、これまで述べてきたENL・ESL・EFLの関係は“Three Concentric Circles of Englishes”として次のように示されている。

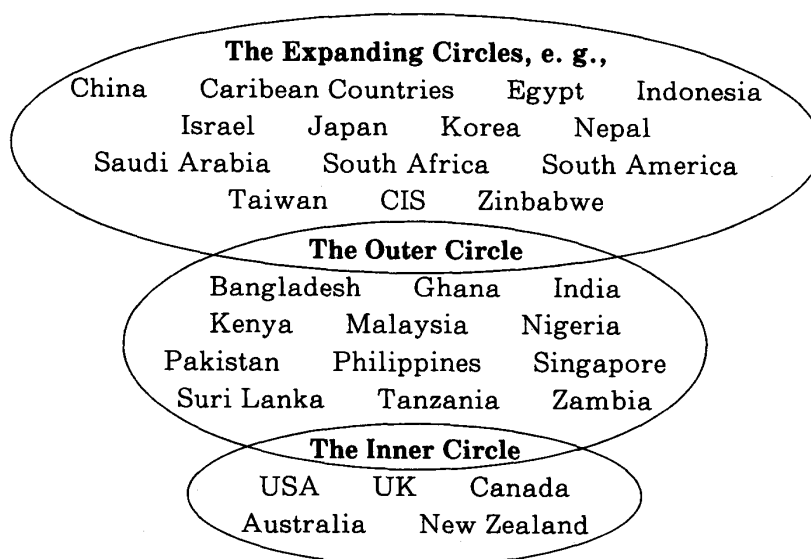


図 3

すなわち, “The Inner Circle” は ENL の国, “The Outer Circle” は ESL の国, そして, “The Expanding Circles” は EFL の国をそれぞれ指している。このように, 大きく三つのグループに纏められる国々のそれぞれで用いられる英語を, Braj B. Kachru 氏は “World Englishes” という概念で次のように説明する。

The concept world Englishes demands that we begin with a distinction between English as a medium and English as a repertoire of cultural pluralism: one refers to the form of language, and the other to its function, its content. It is the medium that is designed and organized for multiple cultural... or cross-cultural... conventions. It is in this sense that one understands the concepts “global”, “pluralistic”, and “multi-cannons” with reference to the forms and functions of world Englishes. What we share as members of the international English-using speech community is the medium, that is, the vehicle for the transmission of the English language. The medium *per se*, however, has no constraints on what message... cultural or social... we transmit through it. And English is a paradigm example of medium in this sense.

When we call English a global medium, it means that those who use English across cultures have a shared code of communication. And the result of this shared competence is that, in spite of various types of crucial differences, we believe that we communicate with each other...one user of English with another, a Nigerian with an Indian, a Japanese with a German, and a Singaporean with an American. It is in this broad sense of interlocutions that we have *one* language and *many* voices.

(Braj B. Kachru, 1995:1)

ここで述べられている ‘World Englishes’ という概念は, EIL として用いられている英語をより具体的に捉えようとしていると考えることができるであろう。まず, “World Englishes” とは, 世界の各地で用いられている英語ということであり, その英語には, 「伝達手段としての英語」(English as a medium) と 「文化的多様性を担うものとしての英語」(English as a repertoire of cultural pluralism) という二面性があることを認識しておくべきであると述べている。言い換えれば, “World Englishes” は, いろいろな文化の慣習に会うように用いられうる伝達手段としての英語であるということができる。われわれが国際的な英語社会の構成員として共有しているのは「伝達手段としての英語」である。そして, その伝達手段そのものである英語は, 伝えるメッセージに関していかなる制限をしないということである。これは, Smith 氏が “When any language becomes international in character, it cannot be bound to any one culture (Smith, 1983:7).” と述べていることとまったく同じことを意味していると言ってよい。

また, われわれが英語をグローバルな伝達手段 (a global medium) であると言うとき, いろいろな文化間の違いを越えて, 英語を用いる人々は, コミュニケーションのために一つの共有されたコードをもつことを意味する。この共有された能力, すなわち, 英語を用いることができるということの結果として, いろいろな国の人々が英語を用いるために, いろいろな注意すべき相違点も出てくるけれども, われわれは, お互いにコミュニケーション

ンができると信じている。例えば、ナイジェリア人がインド人と、日本人がドイツ人と、シンガポール人がアメリカ人と、というように、ある国の英語使用者が他の国の英語使用者とコミュニケーションをすることができるかと信じている。われわれが、一つの言語（英語）を使って、多くの国の人々と会話ができるのは、このような広い意味における会話（interlocutions）においてであると Braj B. Kachru 氏は述べている。

以上、EIL および “World Englishes” の概念を紹介してきたが、この二つの概念は基本的には同じことを指しているかと筆者は考えている。それは、Smith 氏の EIL についての考え方を Kachru 氏は “World Englishes” という概念を用いて、それぞれの英語に焦点を当てるといふ方向へ発展させていると考えることができるからである。その趣旨は、英語はいろいろな国の人々によってコミュニケーションの手段として使われているということ、そして、いろいろな国の人々が英語を共通のコミュニケーションの手段として用いるとき、それぞれの使う英語はそれぞれの言語や文化の影響を受けるため、お互いに理解し合う努力をしなければならないということなどを述べていることになるであろう。そして、前述の国際学会、“The International Conference for World Englishes” がそれぞれの英語および文化を理解するための情報を提供し合う研究発表の場となっていることを付け加えておきたい。

これまでの “The International Conference for World Englishes” における研究発表の傾向から、もっとも積極的に発表が行われているのは、やはり、ESL の英語教育に携わっている人々、および、ESL 国出身の人々の立場からである。彼らの立場では、たとえば、インド（人）の英語、シンガポール（人）の英語、マレーシア（人）の英語等について、その特徴や論の進め方など、それぞれの英語を使う人々の英語および英語の使い方の特徴を紹介し、それらを他の人々が理解できるように情報を提供している。これらの発表が、国際社会において英語によるコミュニケーションをスムーズに行うための助けとなるのは明らかである。

### 3. “World Englishes” の日本の英語教育へ意味するもの

最後に、“World Englishes” の観点から、日本の英語（科）教育の現状を考えてみよう。これまでのところ、英語をコミュニケーションの手段として使えるように指導することができるかとは言えないという点では、「日本（人）の英語」をまだ示すことができているとは言えない。すでに明らかであるように、EIL も “World Englishes” も、国際社会の中で、われわれが、お互いに、英語をコミュニケーションの手段として用いるということを前提としている。従って、まず第一に、日本の英語教育には、「日本（人）の英語」を実現させることのできる英語の指導を行うことが要求されているということを指摘しておきたい。

第二に、“World Englishes” が、世界各地のそれぞれの英語には特徴があるということを示していることで、例えば、日本人の英語には日本人特有の癖があること、また、中国人の英語には中国人特有の癖があるということを示していることを、当然のこととして、われわれに受け入れさせてくれるということを示唆しておきたい。そして、それぞれの英語には特徴があるということを知ることは次の二つの利点につながるように思われる。一つは、日本人特有の癖があることを認めることによって、日本人英語教師はこれまでより英語をコミュ

ニケーションの手段として使うことに対しての抵抗が少なくなり、自由な気持ちで、又は、積極的に、英語コミュニケーションの授業に対応できることが考えられることである。言い換えれば、非母国語話者の日本人英語教師にとって、生徒との英語によるやりとりを通して、英語運用訓練をする場合の精神的負担が軽くなるということである。

もう一つは、他の国の人々の英語の癖に対しても、許容力が出てくるということである。ここでは、中国からの留学生、顔娟婷さん（長崎大学大学院生）の経験を基に、一つの例を紹介しよう。日本人の多くは、英語をコミュニケーションの手段として使うことはできないけれども、日本語の中に英語の単語を自由に取り入れて用いている。そして、その日本人の英語発音の特徴として、「子音+母音」の音型が英語の発音にも表れてくる。例えば、Christmas tree [krɪsməs tri:] は、「クリスマスツリー」[kurisumasu tsuri:] となり、station [stේiʃən] は、ステーション [sutei:ʃən] となる。顔さんによると、大学1・2年生の時の「英語コミュニケーション」の時間に、同級生と英語運用練習をするとき、日本人学生が彼女の中国語の影響をうけた英語発音を聞き取れず、いつも文字で示すことになってしまい、文字で確認できた後に日本人学生が発する英語の発音は、日本語の影響を受けた英語発音（例えば、apple [æpl] は [ápulu] という発音）になっていたという。通常、日本の学校では、日本人だけの英語のクラスであり、日本人が発する英語の発音は、日本語の発音・イントネーションの影響を受けるため、みな同じような発音・イントネーションになってしまうのでお互いに気にならない。しかし、中国語を母国語とする顔さんが発する英語の発音は、当然、みなと同じではない。この場合、お互いに相手を変な発音をすると受け取っていたことになる。‘World Englishes’の観点からこの状況を考えてみよう。この場合、「中国人の英語」と「日本人の英語」の音声面の特徴を知っていれば、お互いに、相手の英語を理解する努力ができることになる。事実、顔さんは、その後、大学院研究科へ提出したレポート（1998年度後期）で、KAWAI社の音声分析器を用いて、「日本人の英語」と「中国人の英語」を分析しており、それぞれの英語が母国語の影響を受けているという明白な特徴を示し、客観的に、顔さん自身の英語も母国語の影響を受けた「中国人の英語」であることを受け入れることができるようになったことを付け加えておきたい。参考までに、顔さんが音声分析器で得た日本人と中国人の英語音声の波形とピッチの型の例を示しておく（〔図4〕を参照のこと）。

英語を国際語として使う場合、‘World Englishes’の視点からの情報をうることが有意義であることは論を待たないであろう。英語をコミュニケーションの手段として多くの国々の人々と共有するためには、それぞれが自分自身の英語の特徴を知っておく必要があるということもすでに自明のことであろう。“World English”の観点からは、もしわれわれが「日本人の英語」を実現できれば、音声面だけではなく、会話の進め方や会話の中の沈黙の意味等の特徴をも含めて、談話構造や語用論（Pragmatics）の領域が有意義な研究対象となりうるということが予測される。今後のわれわれの新しい課題となるであろう。



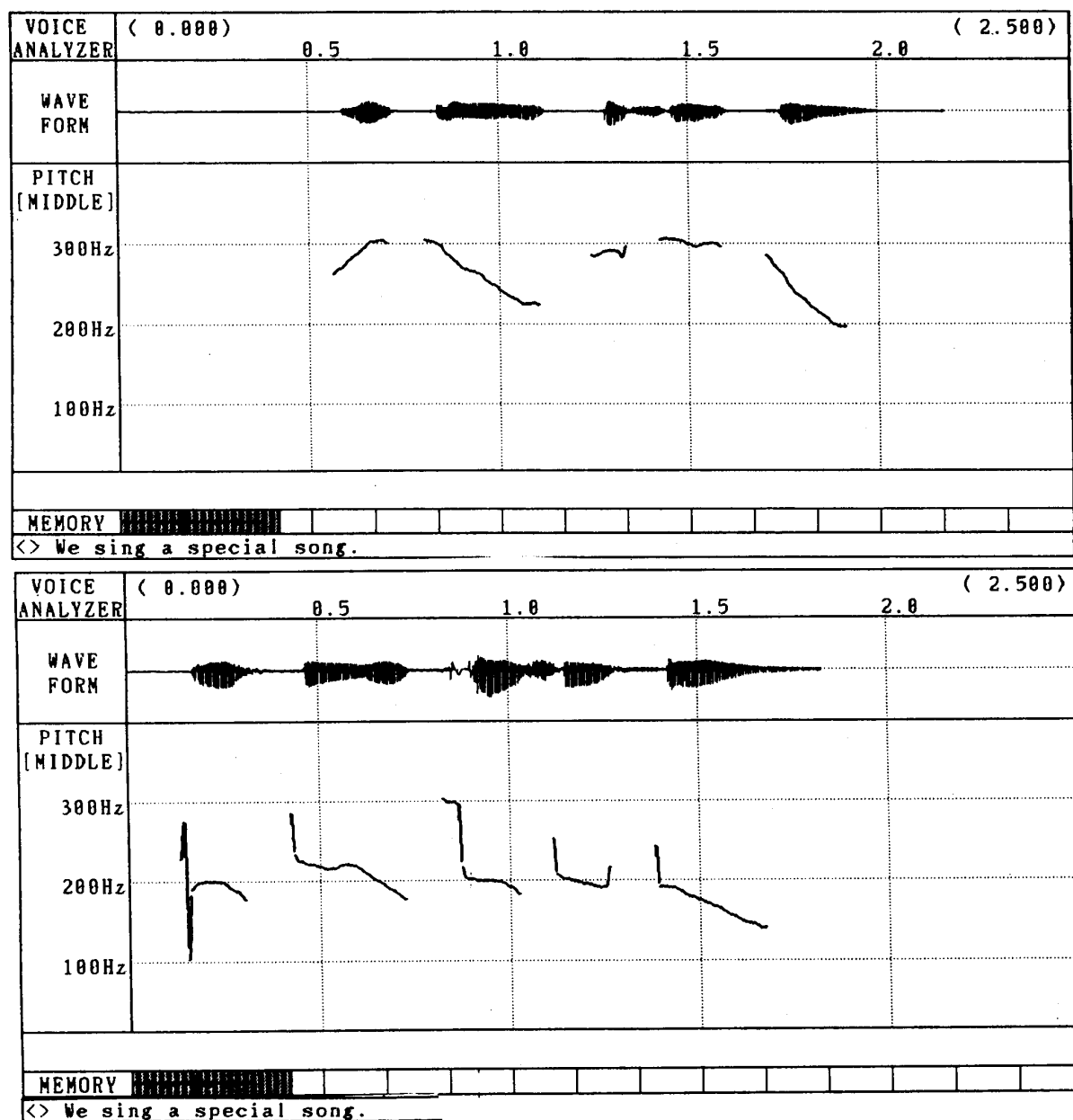


図4 上段の波形とピッチの型は日本人の例、下段は中国人の例

#### References:

- Kachru, Braj B. 1992. Teaching World Englishes. In B. Kachru, ed., *The Other Tongue: English Across Cultures*, Second Edition. Oxford: Pergamon.
- ..... 1995. The Speaking Tree: A Medium of Plural Canons. In M. L. Tickoo, ed., *Language, Literature and Culture*. Singapore: RELC.
- Kachru, Yamuna, ed. 1991. Symposium on Speech Acts in World Englishes, *World Englishes* 10(3).

- ..... . 1991. Speech Acts in World Englishes: toward a framework for research, *World Englishes* 10(3).
- ..... . 1995. Lexical Exponents of Cultural Contact: Speech Act Verbs in Hindi-English Dictionaries. In Braj B. Kachru and Henry Kahane, eds., *Cultures, Ideologies, and the Dictionary: Studies in Honor of Ladislav Zgusta*. Tübingen: Max Niemeyer Verlag.
- Otsubo, Yoshiko. 1978. English as an International Auxiliary Language: Theoretical Difference between EIAL and ESL/EFL/ESOL. *Bulletin of Faculty of Education, Nagasaki University: Humanities, No.27*. Nagasaki, Japan.
- ..... . 1980. Notes on an English Language Curriculum for Future Teachers of English in a Teachers' College. *Bulletin of Faculty of Education, Nagasaki University: Humanities, No.29*. Nagasaki, Japan.
- Smith, Larry E.. 1983. English as an International Language: No Room for Linguistic Chauvinism. In Larry E. Smith, ed., *Readings in English as an International Language*. Oxford: Pergamon.
- Yan, Juan Ting (顏 娟婷) 1999. Awareness of World Englishes (Unpublished paper)